

農山村の景観とその保全・活用

愛媛大学農学部教授

櫻井 雄二



1. 景観

(1) 景観とは

景観はどのように捉えられているのだろうか。最も基本的な概念の定義^(例えば2)から始めてみよう。

そもそも、景観は植物学者がドイツ語のLandschaftに対して与えた訳語として初めて登場したという。景観には類似の呼び方として風景あるいは景色がある。これらには様々な定義および表現がなされてきた。当初、景観と風景・景色とは同じように用いられる傾向にあった。また、地理学分野で景観は「視覚によって認められる地表の相貌」⁷⁾と認識された。それは、景観と風景・景色とを特に区別する必要がなく、同意義に用いても支障がなかったということであろう。

環境問題の一環として景観が取り上げられるようになると、景観と風景・景色とは区別する必要が生じてきた。その定義をいくつか挙げてみる。景観とは「風景・景色およびこれを構成する構造物をデザインするものであり、夢を形にするものである」。また、景観や風景・景色は共に「地表にあるものの眺め」とされている。しかし、「景色・風景は同じ眺めであっても自然が強く意識された言葉であり、主役は自然で人間の営みではない。これに対して景観は、人間をとりまく環境の眺めであり、環境に対する評価に

係わるものである」とされている。

一方、「風景・景色は操作できないもの」をいい、「景観とは操作できるもの」と考えられた。この「景観は操作できるもの」という捉え方は、現在の景観概念を説明する時にも付与される。たとえ自然が主である風景・景色であっても、技術的に操作の対象として認識されるのが景観である、というようにである。そして、優れた景観や地域にとってふさわしい景観を保存するだけでなく、望ましい景観を作る対象であると。

いずれにしても、景観は環境の眺めであり「視覚情報」といえる。そして、何らかの評価をされるべき対象である。また、景観は人が風景を見て、その価値を認めることにより成り立つものでもある。眺められる物を対象とし、視点から対象を見てどのように見えるかによって景観は異なる。即ち、景観は視覚的に見える対象そのものだけでなく、対象が見る者に想起させるもの、心象風景といってもよいものも対象になる。さらに、アメニティ(快適性)に優れていること、エコロジー(生態学)にも配慮されたものでなくてはならない。この点から、景観は和み、心地よさをもたらすものでもあるといえるだろう。

ところで、「主体からみた景観」という人間の生活世界をとらえる際に有効な視点が提出され、景観研究

とは「主体と環境の日常的相互連関の解明」を目的とする。この時、意識対象としての景観が常に意識作用(意味母体)の存在が前提である。このような視点において、①景観は主体にとって常に何らかの意味として与えられる。②景観の意味は「物語」によって表示され、「物語」はまた、景観変化の方向と同時に主体の意識変化の方向を示すものである。③景観研究の課題とは「物語」から意味母体の構造を明らかにすることである。そして、景観は風土の一部として、主体の「自己了解の仕方」だということができる、としている⁷⁾。

また、景観は眺められる対象(物)としての「景」と、眺める主体(人)としての「観」とが密接に絡み合って形成されるものとも定義⁷⁾される。対象をよいように認識し、それが認められると対象が価値あるものとして評価されるということになる。言い換えれば、景観の景は景色、視覚的なものであり、景観の観は認識あるいは哲学というようなものが入っている。見るものと見られるもの、その両者がかみ合って認識になるといえよう。その時、その中身を相対的にあるいは調和的に、かつ統合的に把握する。局部だけではなくである。その中身には環境も含まれる。このことが、景観を近年のむらおこし、まちづくりにあたってのキーワードとした。また、そのむらおこし、まちづくりにおいて、ひとつのキーワードとなっているアメニティと景観が関連してくるのはこの故であると考えられる。

景観は主対象の名称ならびに景観域によって、それらを冠として付けて呼ばれる。例えば、主対象が道路であれば道路景観、橋梁であれば橋梁景観と呼ばれる。後者では、都市景観、地域景観あるいは田園景観と呼ばれる。そして、景観は、一般的には自然景観、文化景観などの構成要素の総体として認識される。さらに、景観は人間にとって心理的環境醸成にかかわるものだといえる。いずれにせよ、景観は、自然であれ文化であれ異なった種類の要素が互いに連関し、総体として特有の形態をもち一定の空間を占有しているものである。

イギリスの都市計画家ウィリアム・ホルフォード卿は、アメニティのある状態を次のように述べている。「適切なものが適切なところにあること」あるいは「然るべきものが、然るべきところにある状態」(the right thing in the right place)。アメニティで重要なことは、単体と全体のバランス・調和であり、この単体・全体の総合的把握として有力なのが景観であるという。これと同じように、藤沢は『あるべきものがあるべきところにあるべき量あること』がよい景観であるとしている。

従来、日本では土木施設に対して機能性と耐久性だけを追求する傾向があり、美観の良さに対する配慮が十分ではなかった。これが土木施設による景観悪化を招いたとされる原因でもある。このことは、土木の設計のプロセスに美観の良さ、つまり景観を評価する段階が抜けていたからである。設計に当たって、景観のような美的要素の強い事象を取扱・評価することは、十人十色といわれるように実は曖昧なものであるとの認識があった。このことが景観を客観的に評価することを工学的分野において敬遠されていた一因と考えられる。

ところで、近年、景観問題だけではなく、国民の貴重な財産である社会基盤を後世に美しいものとして残すという方針で、多少高価についても立派な土木施設を造らなければならないという考えが生まれてきている。即ち、用、強、美の美をないがしろにしていたのを、三位一体と考えて取り組むということで景観の認知・評価が出てきている。その際、土木施設の創り出す美は生活活動から生まれるものであり、共通の価値観ないしイメージを基盤として評価されていくものであることが、一般的に認識されるようになってきた。また、平均的人間の価値観などから主観的なものを評価する可能性と意義を見だし、しかも景観評価は正しくそれに沿ったものであることが認められるようになって、計量心理学的手法などのいろいろな手法が景観評価に用いられるようになった。その結果、美しい土木施設を造り素晴らしい景観を形成するために、事前に評価計画を

することができるようになってきている。また景観整備の目的や目標が曖昧なところがあり、景観整備の意義も人々の納得ゆくものとはなっていない欠点もあるが、事前評価手法によって景観整備が行われるようになってきている。

(2) 農村景観とは

景観とは基本的に心象風景も含めた視覚情報であると述べた。農村ではどのような視覚情報があるのだろうか。先ず直接的には山、森がある。集落、農地、水田や畑あるいはため池もあるだろう。農村の景観は、都市の密集に対しては間隔に隙間があり、これが耕地や林地を擁して余裕空間が出来ており、生活の中で重要な環境となっている。

これらの風景の心象はどのようなものであろう。それは、そこでの生業と強く関連するといえる。その心象は、見る側の人の立場を明確にすればよく分かる。例えば、都会へ出て行きその景観を経験した人にとっての農村景観は、子供の頃の思い出を想起させる懐かしいものであろう。また、暖かく迎えてくれると感じるものでもあるかもしれない。これが景観の持つ意味である。都会で生まれ育った人の中では、農村景観を普段見なれない、潤い、和み、落ち着きあるいは心地よさ、いわゆるアメニティを感じさせるものであろう。都会では失われてしまったものが農村には在る。最近の都会の人達の農村への志向はこれらに由来しているのであろう。

一方、そこに住み続けている人や同じような農村にいる人にはどのように映っているのか、農村居住者が農村の景観をどう評価しているのだろうか。ある調査⁷⁾によると、都市的色彩の濃い景観要素は低い支持率で、農家住宅群や耕地、防風林などは高い支持率をえたという。ビニールハウスや施工済み河川、真直ぐな山道、農村工場などは支持率が低く、「ふさわしくない」と評価されたのである。これは、機能および強度や耐久性だけを求めたものは農村景観に「ふさわしくない」ということである。それは、農村景観に含まれる、生態的なあるいは生態に優しいという面をも表しているといえよう。農村の主な産業であ

る農業は、基本的に生態的現象を活かしたあるいはそれを利用した産業である。このことから農村景観は、農村生活者にとっての「生きる」景観であり、重要な生活環境である。それは、それぞれの日々の暮らし、あるいは産業、即ち農業生産をすることそのものも併せて、日々の暮らしから生まれてきている景観であるといえる。従って、農村における水車はもとより、橋や堰といった日々の暮らしの中にあるものや、生産活動の中にある農業用施設も農村景観の構成要素である。

農村部には、かつて農産物の集散地や交易地、あるいは加工産業地として繁栄した地域が存在した。そして、当時の繁栄ぶりを示す建物が全国各地に残っている。白壁の街、煉瓦作りの街、立派な役場の木造建築などである。それらは見るものに歴史を感じさせ、古き良きもの、時代状況を思い起こさせる。懐かしさ、和み、心地よさを呼び起こさせる。それらの建築物はいわゆる伝統的建造物の対象になりうるものである。これらは現在の生活様式に合わない部分が多く、取り壊しの対象とされるあるいは既に取り壊されたものも多い。しかし、これら歴史を感じさせる種類のもは、農村だけでなく地方都市あるいは都会においても残っており、時に保存への動きが報じられる。

次に取り上げる内子の海鼠壁や虫籠窓などを持つ建物、松山平野に点在する長屋門も、歴史を感じさせる建物、祖先への愛着を呼ぶものとして、これに当たるであろう。

(3) 農村景観の保全と活用

このような農村景観を維持・保全し活用するに際しては、農村生活者にとっての「生きる」景観であり、重要な生活環境であるという基本姿勢を守ることが要である。

日本の終戦以降、特に高度成長期といわれた時が典型的であるが、効率的、簡易であることを追求し古き良きものの多くを壊してきた。建物で言えば先述した用・強を追求してきた。真に用・強であったかというところでもない。それは、現在建てられて

いる木造建物が20～30年で建替を考えねばならない様子がそれを示している。

景観の維持・保存ならびに活用していく効果を上げるためには、「①景観が自然生態系からみても健全で、農林漁業の経営が安定していること、②村落社会が常に活気に満ちていること、③社会が文化の保持に熱心であり、景観保全の価値に目ざめていること」、の三点が挙げられる。これらの保持が困難であれば、地域社会の崩れをもたらす、それは景観そのものの劣化として現れるであろう。しかし、農村景観は日々の生産活動をはじめ暮らしに根付いたものであることから、その価値に目覚めていれば、長く持続的に景観を維持できる可能性が高いと考えられる。従って、その価値を認め関心を常に寄せる工夫が非常に重要なことになる。

2. 農村景観の活用—内子の場合—

(1) はじめに

愛媛県内子町は、県都松山市から南南西に約30kmに位置し、人口約12千人を擁する山に囲まれた地域である。内子町では、町並みの保存運動によって全国的に知られるようになり、さらに村並みと称してむらおこしにも力を入れている。景観を通して具体的に、どのようにして地域の宝を見いだしていくのか、地域を起こしていくのか、あるいは維持していくのかというようなことからみると、内子は非常に良い示唆に富んだものを提供している。内子町の人々はその経験してきた。また、それをきっちりと支え、現状まで発展させるには、行政等の働きもあつたと評価できる。そこで、このようなまちづくり、むらおこしに関して、その際の取り組みなどを内子町の場合を取り上げて考えてみよう。内子町における景観の保全・活用に関しては多くの記述がこれまでになされてきた。ここでは、先述した景観の捉え方との対応ならびに課題と考えられることを述べることにする。

内子町には、景観要素として次のようなものがある。

町並み保存の対象となった海鼠壁、鰻絵、虫籠窓

などが見られる木蠟で栄えた往時の建物、地方芸能・文化を物語る内子座がある。この地区では、この他に近年「高橋邸」が保存され、宿泊施設として活用されている。

また、町並みに続いて、村並みと称するむらおこしを行っている地区がある。そこには、景観の構成要素として、このむらおこしの端緒となった施設である水車がある。石畳の宿は、町外からの客を泊め、地域のお母さん達に自信を持たせ活性化させた施設である。堰(正体下堰と明野地堰)は改修に当たり、生態系に配慮する工夫が試みられたものである。屋根付き橋(田丸橋)は、橋の腐蝕を防ぐために屋根を設けられた木橋で、昔、木炭の出荷時は倉庫として、あるいは農作業の休憩場所として今も利用されている。現在、いずれも地域の人が管理を行っている。

この他に中山川と小田川の合流点にある河川景観を背景として道の駅「内子フレッシュパークからり」がある。また、農産物の集荷地であった大瀬の町並みに旧村役場の木造建物がある。からりについては、その活動の中身だけでなく景観もその総体的な価値に役立っているのではなかろうか。景観は操作できるものということ、からりは如実に表しているのではないだろうか。からりと大瀬の旧村役場についての活動・運動について、ここでは詳しく述べない。しかし、特に大瀬の建物はよいもの、残し活用すべき対象であることは一目で了解できるであろう。

(2) 町並み

先ず景観の対象となるものが日本の社会情勢の中で取り壊されずに残っていたことが挙げられる。即ち、八日市・護国地区には高度成長期以降の近代化の中で、地域としての開発を免れ古いたたずまいが残っていた。次にその価値の発見者が現れる。その対象が価値あるものではないかという認識の変化が生じ、その通りにある建物の歴史的な価値に目覚め保存活動を開始した。最初、それは一部のものだけであつたろう。それを文化庁、NHKをはじめマスコミが取り上げ後押しすることにより、住民の意識が変わり内子町として町並み保存の取り組みが始まる。よ



町並み風景(内子町提供)



高橋邸



本芳我邸&大村家(内子町提供)



石畳清流園(内子町提供)



内子座正面(内子町提供)



水車



内子座内部(内子町提供)



石畳の宿(内子町提供)

り多くの地元の人がより明確に変化をし、その動きが輝き始める。そして、「生活の場としての地域の美を官民一体となって歴史と文化を軸に保存・再生している」と、内子町における町並み保存の取り組みを文化庁が評価したのである。以後、町職員の色々な場面での活躍と、外部からの評価を得たことを原動力により方向に車がまわり、現在では町並み保存に関して全国的に有名になりブランド化されている。対象地は昔、木蠟として、即ち産業として栄えた地である。そこの住民の生活の場所として繁栄を映し出した建物、それを掘り起こし、再度、新たな認識を与える。あるいはそういう認知手段ができたということで、今のような展開になっていると捉えられる。

(3) 村並み

石畳は内子町の中心部から約12kmにある130戸ほどの集落である。この地区でも他の中山間地同様に高齢化、過疎化が進んでいる。このままでは地区の存続の危機が訪れるかもしれないという思いの下に「石畳を思う会」が12名で発足した。最初は少人数である。その中には町並み保存で活動した町職員が入っていた。彼が仕掛け人のようである。そして、地元で元々あったものの近代化の波で失われていた水車を、自ら一人5万円の資金を持ち寄り、協働して地区に自慢のできるものをつくらうと復元を行った。それが他地区の評価を受け、見学者が訪れるようになるとさらに意識が変わっていく。現在、町が造った1基を含めて3基が稼働している。また、築80年の農家を移築して宿泊施設とし、地元の主婦が賄いなどの世話をするようになり、なお多くの客が石畳を訪れている。現在では「石畳を思う会」の会員も増え、地区住民からも認知を受け評価をされている。そして、地元を流れる麓川の河川環境を考え、今では農業生産活動も減農業を志向する向きが出てきているという。また、子供も巻き込んでのホタルの育成、地元の花や古木による花いっぱい運動や古木づくりに取り組んでいる。これらの活動は村並み保存と称される。心の豊かさを持って石畳に住んでよかった



田丸橋(内子町提供)



明野地堰



正体下堰

と自信を持てるような村づくり、里づくりに励んでいるという。さらに、その核になって活動している人は、農村景観を農家が農業で生産活動することと喝破し、その生産活動が農村景観を作り出し、守って行く一つの大事な営みと表明している。このように、農村景観を見、守っていく、さらには活用していく認識に大きな展開を見ている。

(4) 課題

① 農村景観

農村の景観は潤い、なごみ、心地よさ、快適さを

もたらず。この景観を保全し活用して地域づくり、まちづくりがなされるが、その農村の景観づくりの意義としては「①自然環境の保全と管理、②農村の文化・文学的表現、③日本の深層文化の保全と継承、④地域住民の気概(誇り)づくり、⑤農村経済の多様性の創出の手段となる、⑥都市民の多様な自己実現の場、保養空間の提供」、が挙げられている。これらは、景観の保全および景観の活用に当たって考慮すべきあるいは取り組む項目である。

② 意識の変革

今、内子町は町並みから村並みへと展開し「引き算型まちづくり」というものを提唱し始めている。町長は造っていくことを止めて除けていく、例えば電柱や看板を視界から除けていくことによって景観をよくするまちづくり、と分かりやすく解説している。これは「まちづくりとは価値観の問い直し」の実例でもある。また、これは先の景観とは述べたように、景観は対象についての認識を変えることにより価値を見いだすということに当たるであろう。これを言い換えれば、先述したように景観の景は景色、視覚的なものであり、景観の観は認識あるいは哲学というようなものが入っている。見るものと見られるもの、その両者がかみ合って認識になる、認識が変わるといえよう。その時、その中身を相対的にあるいは調和的にかつ統合的に把握する。局部だけではなくである。その中身には環境も含まれる。

③ 担い手と支援

内子町の町並み保存は、キーパーソン存在と住民の呼応、行政の支援ならびに他地域、例えばマスコミ、文化庁ならびに学識経験者等が保存運動を裏付け支えた結果であるといえよう。なお、キーパーソンも勉強しながら成長していったのではなかろうか。それを他地域あるいは学識経験者等が支え、軸のぶれを修正する。また、運動がある程度進むと地元の人がキーパーソンを成長させる。そして、地元の人々の動きがより輝き成果を示す。

運動を具体化するにおいて何が力を発揮させるのかというと、地元の人々の動き、地元の人がどうい

運動をしているのかであり、その動きが問われる。その動きを行政や学識経験者等がサポートすることで、より活発に展開できると考えられる。さらに、一般的にもいえることであるが、計画の段階から学識経験者等の意見だけではなく、地元住民の意見を取り入れると実行時にもことがスムーズにいくと考えられる。

④ 展開

景観にてまちづくり・むらおこしをしていこうとする際には、景観で景色であるいは環境で金になるのかということが、何時でも何処でも問題になる。町を潤して欲しいということ的背景にしてこの欲求が生じる。お金になるということには前提がある。金儲けだけに走っていると、元も子も無くしていく可能性が強い。その失敗の具体的な例として、山梨県の清里が挙げられるであろう。

景観で金になるというのは、基本的に観光によって収入を得ることといえる。農村景観の内、昔の建物や街並みによるものにそれが当てはまることは容易に理解できるであろう。戦前、日本は観光立国とまではいかないが、観光収入がGNPに占める割合がかなり高かったという。ところが、高度成長期を通じて、観光に対するGNP比率が圧倒的に落ちてきている。ヨーロッパ、例えばイギリスあるいはドイツなどでは、第2次大戦後の厳しい時から立ち上がってくる時、景観および古くからのものに配慮した結果、あるいは古いものをそのまま再現することによって現在は相当な観光収入を得ている。

そこで清里の例とは、一時期の清里は原宿のような東京都心のものと同じ状態と比較して持ち上げられ、地域外からの資本も参入し非常に活性化していた。ところが、少しの期間を過ぎるとそれが減退し、外からの資本は早々に引き上げ、今、地域には参入者および観光客がほとんどいない。10数年前、アンケートによる訪問客の意見に従って整備したところ、そのけばけばしさで清里の良さを失ってしまったのである。現在、地元に残っている人がもう一度立ち上げ始めるべく地道な努力をしている。自分たちの町

はどのようなことが特徴で、どういうふうな内容であるかというところから商店街の人が立ち上がっている。その方たちは、清里の本来あった田舎風の良さをもう一度再構築しようと頑張っている。この清里の例は、観光は金儲けにはなるのだけれど、金儲けだけに走ると持続性が無くなるという典型である。外部資本は地域への愛着度が薄く、まちづくり、むらおこしの場合には、元々生まれて来た価値を考慮しなくなると地域にとってはマイナスとなる。

京都の寺社などのように、それだけで集客能力を持つ、故に客が来る。そのようなところにある商店と、歴史を感じさせ、なごみを感じさせる建物によって集客能力を発揮している所、そのような風情のある建物のある通りでの商店とは、取り組みが自ずと異なるし異ならなければならない。なぜならば、そのような風情を醸し出す元になる建物は、内子だけでなく全国をみれば多くみられる。その類似個所では、内子のように全国的に知られブランド化されているかという点も必ずしもそうでもない。この基本的な元になるものの特性は、常に想起し忘れてはならない。

内子町では、現在、年間50~60万人の客が訪れる。人数として多いか少ないか。人数の問題ではなく、質の問題である。質が持続性を維持できるかのキーとなろう。ここまで展開してきた内子町の取り組みは27年目に入るが、今後も持続し、さらなる展開ができるかの時点に入っているのかもしれない。それには、内子の町並みにおける歴史的建物を伝統的建造物と認知し、よい景観として保存し、それを見に来る客がいる価値とは何なのかを常に自問しておく必要があるだろう。

3. 最後に

景観を守る、古いものを守るということは、放っておくということではない。その間、補修をすることになる。補修をする、景観を作る、操作するということは、それだけの技術が要る。現在は、最先端の技術あるいは部材を使って色々なことがで

きるようになっている。補修に関しても色々なことができる。システム上、あるいは行政システム上、そういう支出ができないという制限はまだ存在するが、現在はかなり、というよりもほとんどのことができるような技術開発がされている。そういう技術や部材を活かしていくということが大事である。

また、職人技術を大事にするシステムを再構築することが必要と考えられる。石垣を造る技術も同様である。昔からある旧家の家では古くからある建物もある。そういうものが残っているのは、職人技術を使い、あるべきものをきちっと使っているからのようである。屋根付き橋についても、何年かに1回ぐらい屋根を葺いて補修しなければいけないという。長くそういうものの価値を存在させるためには、補修という常日ごろのケアが必要である。それは常日ごろ対象物に対して関心を持っているということになる。景観が持続的であるということは、意識を継続させているということと考えられる。

生活の利便性を求めて、また地域の発展を願ってインフラを整備する。例えば、高速道路の建設を願う。その実施設計の時に景観からの注文は多くを出しにくい状況にある。しかし、農村の自然ばかりの景色の中に人工構造物が突然現れることに対して、少し高価にはなるが、自然と調和させるために色々な方法、技術が提案されていることを主張していく必要がある。

一般に、都市生活者にとって農村は、自然が豊かでレクリエーションの場というように、訪問者にとって農村景観は「見る」景観となる。農村居住者は、伝統的な山を背にした集落や鎮守の森などが望ましいとする、住民として「生きる景観」を認識している、との指摘がある。これは、景観整備について「誰のための景観か」という基本問題を考えることを示唆したものである。この都市と農村、それぞれの生活者の農村景観についての方向性が異なっていることを認識して整備を行っていくことが重要である。

何故に景観を保全しなければならないのか。景観を活用したまちづくり・むらおこしをするというこ

とはどういうことなのか、そのためには何をしなければならぬのか、してはいけないのか。このようなことを考える時、景観の定義からいえる「よい景観とは」を想起しなければならない。

引用・参考文献

1. 梅田安治・野本 健：農地・農村の景観、農業土木新聞社、1990.
2. 石井一郎・元田良孝：景観工学、鹿島出版会、1990.
3. 藤沢 和：実践景観論、地球社、1992.
4. 進士五十八：アメニティ・デザイン、学芸出版社、1993.
5. 目瀬守男・他3名：農山村地域の商・工・観光振興、明文書房、1993.
6. 糸長浩司・他5名：地域のデザイン、明文書房、1993.
7. 横山昭市：第1章 景観の認識と活用、農山村の景観等を活かした新しいむらづくりに関する研究事業、愛媛県社会経済研究財団、pp.29-58、1993.
8. 名智 満：第3章第3節 景観利用とはなにか、農山村の景観等を活かした新しいむらづくりに関する研究事業、愛媛県社会経済研究財団、pp.115-124、1993.
9. 櫻井雄二：第4章第2節 内子町、農山村の景観等を活かした新しいむらづくりに関する研究事業、愛媛県社会経済研究財団、pp.151-194、1993.
10. 亀地宏のまちづくり紀行、愛媛県内子町 石畳の宿、地方財務、No.501、pp.401-415、1996.
11. 第5章 5-3 市町村における総合的取り組み[地方都市の町並み保全とまちづくりの課題—内子町の事例から]、平成9年度 国土庁地域活性化推進費 地域の歴史的特性を活かした中山間地域の活性化推進方策のあり方に関する調査 伝統的集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討 報告書、文化庁文化財保護部、pp.115-120、1998.
12. 竹迫昇治：「町並み保存」から「村並み保存」へ 観光化の狭間で得たもの、失ったもの、まちの雑誌、No.5、pp.18-28、2000.
13. 対談、まちの雑誌、No.5、pp.29-31、2000.
14. 澤田孝蔵：町並み保存から村並み保存(愛媛県内子町)、先行事例にみる地域づくり —住民参加型地域活動(地域づくり)に関する研究—、東北電力(株)地域交流部・(財)東北開発研究センター、pp.71-85、2002.

Profile 櫻井雄二

1947年生まれ。京都大学大学院修士課程修了。農学博士。

愛媛大学農学部助手、助教授を経て、1992年から現職。愛媛県21世紀えひめ村づくり推進協会アドバイザー。愛媛県農業農村整備に係る環境情報協議会座長など。

所属学会：農業土木学会、農村計画学会、日本景観学会、雨水資源化システム学会、棚田学会など。

論文、著書：「大規模草地造成に伴う土・水環境の変化と保全に関する基礎研究」(農業土木学会論文集(共著))、「農山村の景観等を活かした新しいむらづくりに関する研究事業」(愛媛県社会経済研究財団(共著))、「新流域論 愛媛発・新資源形成型循環空間の創造」(農林統計協会(共著)) 他

受賞：農業土木学会学会賞奨励賞